

<特集「京都府立医科大学の看護教育開始から120年を経て～そのはじまりをみつめる～」>

## 同志社病院・京都看病婦学校ではじめられた看護教育

～リンダ・リチャーズの日本での活動から～

岡 山 寧 子

京都立医科大学大学院保健看護研究科保健看護専攻\*  
京都府立医科大学医学部看護学科看護学講座

### Nursing Education Begun at the Doshisha Hospital and Kyoto Training School for Nurses —Starting with the Achievements of Linda Richards in Japan

Yasuko Okayama

*Graduate School of Nursing and Health Care Science, Master of Nursing for Health Care Science,  
Kyoto Prefectural University of Medicine  
School of Nursing, Kyoto Prefectural University of Medicine*

#### 抄 録

1886(明治19)年の秋、同志社病院・京都看病婦学校は、アメリカでの最初の訓練看護婦であり、経験豊富な看護指導者リンダ・リチャーズを学校長に迎え、日本でも非常に早い時期に、看護教育を開始した。それは、当時の欧米での最新の看護教育プログラムと立派な病院・教育施設が備えられていた。また、キリスト教を倫理基盤として、伝道活動も積極的に実践した。L.リチャーズは、明治中期の5年間、実質的には約4年間、創設期における看病婦学校の看護教育と病院看護の実践に尽力し、また伝道活動にも積極的に取り組み、学校長と宣教看護婦の役割を果たそうとした。L.リチャーズにとって、異国の地でのこれらの活動は、本人の想像以上に苦勞の連続であったが、彼女の送り出した卒業生の多くに日本や海外で幅広く活躍した足跡がみられる。

キーワード：同志社病院・京都看病婦学校、リンダ・リチャーズ、看護教育、伝道、宣教看護婦。

#### Abstract

In the fall of 1886, the Doshisha Hospital and Kyoto Training School for Nurses began nursing education at an extremely early time in Japan with Ms. Linda Richards, the first trained nurse in the U.S. and an experienced nursing instructor, serving as its director. This institution offered the most advanced nursing training program at the time in the U.S. and Europe along with outstanding hospital and educational facilities. In addition, it was also aggressively engaged in evangelical activities based on the moral foundation of Christianity. Ms. Richards devoted herself to the implementation of nursing

education and hospital nursing at the training school for nurses for five years, although substantially for about four years, during the middle of Japan's Meiji period starting at the time of its founding, and was also aggressively engaged in evangelical activities in an attempt to fulfill the roles of both Superintendent for School and missionary nurse. Although these activities in a foreign land proved to be a series of unimaginable hardships for Ms. Richards, the fruits of her efforts can be seen in the numerous graduates from her school who served in a wide range of disciplines both in Japan and overseas.

**Key Words:** Doshisha Hospital, Kyoto Training School for Nurses, Linda Richards, Nursing education, Evangelism, Missionary nurse.

## はじめに

府医学校に附属産婆教習所が開設される少し前、1886 (明治19) 年の秋、京都御苑の西側 (現在のKBS京都付近) に位置する同志社病院・京都看病婦学校 (以下、看病婦学校) で開始された看護教育は、アメリカでの最初の訓練看護婦リンダ・リチャーズ (Melinda Ann Judson Richards, 1841~1930: 以下L. リチャーズ) を学校長 (Lady Superintendent for School) に迎え、当時の欧米での最新のプログラムで展開した。

看病婦学校の設立背景や経緯、教育内容などについては、すでに多くの文献で紹介されているが、筆者はアメリカにおける近代看護教育史でのL. リチャーズの足跡を辿っていく中で<sup>1)</sup>、彼女が明治の頃、宣教看護婦としてこの京都の地で看護教育に携わっていたことを知り、今までに彼女の初来日から京都での教育開始までの経緯<sup>2)</sup>、看病婦学校での教育<sup>4)</sup>や卒業生の動向<sup>8-10)</sup>等、日本での足跡や実践した看護教育とその影響を検証してきた。

本稿では、看病婦学校ではじめられた看護教育、すなわち、L. リチャーズが学校長として尽力した看護教育の概要と彼女自身が記述した史料等からその具体的な実践内容を紹介したい。

## 看病婦学校の設立

看病婦学校の設立者は、キリスト教主義に基づく同志社英学校を創設した新島襄 (1843~1890) である。彼は、当初、伝道には医学校設立が必要であると考え、宣教医ジョン・ベリー (John Cutting Berry, 1847~1936: 以下J. ベリー) に協力を求め、準備をすすめた。しかし、必要

な資金を獲得できなかった上に、彼らの属する米国海外伝道委員会 (American Board of Commissioners for Foreign Mission: 以下、アメリカンボード)<sup>11)</sup> の賛同が得られなかった。そのため、医学校設立を断念した一方で、計画を看護婦の学校と病院設立に修正、実行した。看病婦学校が正式に設置認可を受けたのは1887 (明治20) 年8月で、開業式が同年11月に行われたが、前年の1886 (明治19) 年9月には、すでに看護教育および病院業務を開始していた。開設時、病院長はJ. ベリー、看病婦学校校長は新島襄 (京都府への開設伺いにはL. リチャーズが校長とある) であった<sup>12)</sup> (図1)。

## 看病婦学校開設時の教育概要

京都看病婦学校の教育概要を紹介する文献は多いが、そのほとんどが同志社百年史 (資料編1) にある同志社病院および京都看病婦学校規則<sup>13)</sup> に基づいている。それには、学校規則として4篇が掲載されているが、その制定・改正年が明確でないものもある。筆者はこれらの規程の中で、最初に制定された規則は、同志社病院・京都看病婦学校の第2回年次報告書 (英文) に付記されている「明治20年6月採用」の規則であることを確認している<sup>5)</sup>。また、実質的な看護教育は、指導者の下で病室での実際業務を通して学ぶ実地学習が大きな部分を占めているが、その具体的な内容は、同志社病院規則に定めている (明治20年6月)<sup>15)</sup>。これら開設時の京都看病婦学校規則および同志社病院規則に基づいて、看病婦学校開設の頃の教育内容を簡単に紹介する。



図1 明治20年頃の同志社病院・京都看病婦学校  
(Life and Light for Women of Women's Board of Mission,  
Vol.18, No.3 より)

## 1. 学校規則<sup>5)14)</sup> からみた看護教育プログラム

看病婦学校の就学期間は2年間で、3学期制をとっている。志願者の資格は、30歳から40歳までの身体壮健で品行方正であることを保証する証明書を有し、文字が書け、観察力に秀で、聖書を読んで理解できる者とする。

学生はNurses Homeに居住し、学科目の勉強と病院の看病婦として業務に携わる形で教育される。授業料は無料、寮費は月約2円50銭、病院業務用のユニフォームは支給される。修学修了時には卒業証書が授けられる。

教育内容は、実際の看病法の口述説明とデモンストレーションが2年間毎日1時間行われる。具体的な項目は、1年生1学期にベッドメイキングとリネン交換、褥創の予防と手当、体位の変換、体の清潔法、2学期には包帯法、温湿布とハップ、吸角法とヒルの使い方、ガーゼ交換、マッサージ、3学期は体温・脈拍・呼吸の測定と記入法、換気法、浣腸法、カテーテルの使用法、与薬法で、夜間看護も含まれる。2年生の1学期に死後の処置、毒物と解毒剤、患者の観察法、医師と看病婦の関係、患者と看病婦の関係、2学期には病人の食事、発熱の看護、分娩と分娩前後の看護、新生児の世話、婦人科疾患患者の看護、小児疾患の看護、病室管理、3学期は電気器具の使い方、止血法、救急法、外科看護、防腐剤と消毒剤の使用法、心疾患と肺疾

患の看護、神経疾患の看護、眼科・耳鼻科疾患の看護の説明とデモンストレーションである。看病法以外では、解剖学、生理学、薬剤学、産婆・育児学、電気器具使用法が教授される。また、聖書の授業が2年間を通じて行われている。授業以外の時間は、学生はL.リチャーズの指導のもとで患者の看護に携わる。業務は8時間の3交代制である。

## 2. 病院規則<sup>5)</sup> からみた看護業務・実地学習

病院規則によると、病院の目的は看病婦の教育、患者の診療と看護、キリスト教伝道である。規則は12の項目で構成されているが、その中の「VI看病婦」には、看病婦の業務内容が詳細に述べられている。

それによると、看護業務として26項目が掲げられており、学校規則での授業内容のより実践的な方法を表している。例えば、ベッドメイキングや身体の清潔では領域別にその方法を示し、授乳前後のベビーの口腔清潔や母親の乳頭の清潔保持、整髪の実施や食後2時間以内の入浴は行わない等、具体的に示している。また、体温は、腋下10分、口腔内5分間測定し、記録することを説明している。換気法は、通常1日3回10分間、天候の変化によりそれを調整し、換気中の患者への配慮も含め細かく示している。消毒法も患者に使用した衣類、便器、注射

器に至るまで洗浄，石炭酸による消毒をすること，看病婦の手指消毒にも触れている。薬剤の管理も示している。

さらに，回診時の留意点，急変時の医師への連絡，患者のプライバシーへの配慮や患者情報の秘密保持にまで及んでいる。病棟管理面で，リネン類や便器等がいつでも使用できるように定位置に設置する，病棟の出入り口の施錠，話し声や足音が患者の睡眠に影響を及ぼさないように配慮する等を示している。看病婦の規律として，ユニフォームの着用と洗濯，仕事上で困った時は学校長に相談する，患者等からの贈り物は受け取らない等を明記している。

### L. リチャーズと日本での看護教育

L. リチャーズは，アメリカで最初に近代看護教育を受けた訓練看護婦 The First Trained Nurses in America と称され，アメリカでの近代看護教育草創期に活躍した歴史的な人物である。彼女は，70歳の時（1911年）に自身の回想記 *Reminiscences of Linda Richards* を出版し，それまでの彼女の足跡を詳しく述べている<sup>16)</sup>。それによると，彼女は十代の初めから「生まれながらの看護婦 Born Nurse」と呼ばれ病人の世話をしていた。1873年にボストンのニューイン

グランド婦人子供病院看護学校を卒業後，ペルビュー病院の夜間看護監督に就任，1年後ボストン看護学校に移る。1877年英国に渡り，F. ナイチンゲール（Florence Nightingale, 1820～1910）の援助のもと，聖トマス病院等で看護教育や管理の研修を積んだ。帰国後，ボストン市立病院看護学校の創設から看護学校長兼病院看護監督者として活躍した。この経過の中で，彼女は「私の務め duty」として日本で看護教育・看護活動を決意したと記している。

彼女の日本での足跡は，1886（明治19）年1月21日，City of Sydney 号 (American Steamer) で横浜に到着した時から始まる<sup>17)</sup>。初来日後，本格的な看病婦学校設立準備への着手は，同年夏頃からである<sup>23)</sup>。

L. リチャーズが実践した看護教育については，彼女が記述している回想記<sup>18)</sup> や書簡<sup>19)</sup>，看病婦学校年次報告<sup>20)</sup> 等により，彼女自身の目を通して，具体的な内容やその特徴を垣間見ることができる。それは，言いかえると，彼女が着任していた看病婦学校の創設当時の看護教育・看護実践の特徴を示すものであるといえる。ここでは，それらの一端を紹介する（図2）。

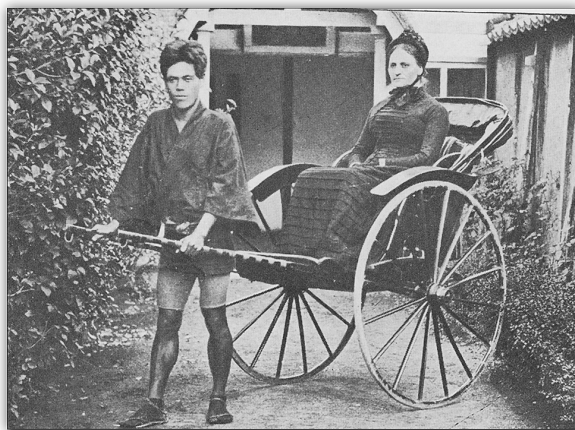


図2 人力車に乗ったリンダ・リチャーズ  
 (Reminiscences of Linda Richards, America's First Trained Nurse, Whitcomb & Barrows, Boston, 1911. P72-73の間より)

## 1. 欧米からの直輸入的で先進的な看護教育の実践

L. リチャーズが学校や病院規則の作成にどの程度関わったのかは、今のところ明らかではない。しかしながら、看護教育体制や内容には、彼女が英国留学で見聞した聖トマス病院ナイチンゲール看護婦養成学校や来日前に学校長の任にあったボストン市立病院看護学校を範とした、当時としては最新のものを直輸入していることがうかがわれる。例として「看護学生に必要なこと」を挙げると、看病婦学校規則では「学生」の項の2番目に、「生徒は、まじめで、正直、誠実で、信頼でき、時間を守り、静粛で、秩序を守り、清潔で、忍耐強く、親切かつ明朗であること。‘The Nurse will be required to be sober, honest, truthful, trustworthy, punctual, quiet, orderly, patient, kind and cheerful.’」と規定しているが<sup>514</sup>、F. ナイチンゲールの救貧病院における看護の附録にあるナイチンゲール基金による見習い生の職務の中で、前述とほぼ同一内容の記載がみられる<sup>21</sup>。また、ボストン市立病院看護学校 Historical Sketch による学校開設案内資料にも全く同一内容がみられる<sup>22</sup>。これらから、F. ナイチンゲールの考え方やアメリカでの看護教育がL. リチャーズを通じて、日本に導入されたことがうかがわれる。

反面、実際の看護内容が直輸入的すぎて、当時の日本の医療や生活事情が十分配慮されていなかったのではないかと推測される。例えば、ベッドメイキングの方法やリネン交換など、当時の日本の寝具とはかなり異なっており、西洋式に実施するにはかなりの工夫が必要だったと思われる。ベッドは日本の大工が製作し、木の枠にマットとして厚い布団が用いられていた<sup>23</sup>。また病院規則にはリネン交換や清拭方法が細かく定められているが、当時の日本での清潔習慣を考えると、イメージすらしにくかったのではと思われる。L. リチャーズは、回想記の中で、初めの頃に看護婦の訓練で最も困ったのは、彼女たちの生活習慣であると述べている。例えば、「栄養学では、日本とアメリカの食物の根本的な相違のためにかかなり大変な仕

事であった。このことに関しては、しばしば教師が生徒になるという場面もあり」と述べ、食習慣の違いから栄養学の授業で非常に苦勞した様子がかがえる<sup>24</sup>。また、彼女の書簡の中でも「病人の世話でも日本流を改めるには時間がかかる（中略）ベッドは好まない（中略）起きられるまで入浴しない、病人の食事でもとてもかたい等々」と日本の生活習慣への違和感を記している<sup>25</sup>。それは、欧米から導入した看護の方法や内容を日本の風土・習慣にいかにか馴染ませていくのかという苦勞でもあったともいえる。それらは以後の教育の中で徐々に修正が加えられ、調整されて、ひいてはその後の規則改正に繋がっていったと考えられる。

一方、病院での実施学習の際、学生はアメリカの看護学校で通常に用いられているユニフォームを着用した。それは、青い縞のギンガムのワンピースに胸当てつきのエプロンと白のモスリンのキャップであり、L. リチャーズ自ら製作したものであった。L. リチャーズは、その姿はとても可愛くみえたと述べているが<sup>26</sup>、京都の人々にとっては、とてもハイカラな西洋風職業婦人として映ただらうと想像できる。

また、1886（明治19）年に開催された大日本私立衛生会京都支会において、J. ベリーが行った「京都看病婦学校設立の演説」の看病新法の中に、L. リチャーズから聞いたという清拭方法についての具体的な説明がある。それは、次のような内容であった。「患者に浴させる時には奇麗なるフラケットを取り来り先づ患者を己が方に向け直して其背後にケットを布き広げ静かに患者を其上転ばせ（中略）而して患者の寝衣を寒気を生ぜず様ケットのしたより脱ぎて浴をなさしむ浴のためには湯にてもまたは生ぬるき湯にても患者の容体に應じて用ゆること（中略）寒気を防ぎ浴畢りて後暫く患者を休ませる」<sup>27</sup>。患者の容体に應じての対応やプライバシーや安楽、保温への留意等、ケアの原則に沿ったきめ細かい清拭方法を非常に具体的に表現している。これは、L. リチャーズが説明だけでなく実際に患者に実施しながら、J. ベリーに伝授したことがうかがわれる。

## 2. キリスト教伝道と看護教育

看病婦学校の教育基盤にはキリスト教伝道が大きな位置を占めていた。看病婦学校の入学資格に「聖書が読めること」、カリキュラムにも聖書の授業が2年間あり、毎朝の祈祷や日曜礼拝出席が義務づけられている。また、病院設置目的の1つに「キリスト教の伝道」を挙げている。開学当初の入学生の出身地をみても、国内のアメリカンボード所在地から多く輩出されていることも伝道を意識していることがみてとれる<sup>28)</sup>。また、設立者である新島は、キリスト教を看護の倫理的基盤として、キリスト教による徳育教育および看護に関する知育教育を目指していたとの指摘もある<sup>4)</sup>。伝道的手段として看護婦を養成する、つまり、看護婦という専門職業人の育成、それ以上に伝道を主眼においた伝道看護婦の育成が念頭にあったと考えられる。

L.リチャーズも回想記の中で、「私は本来宣教師として日本に行くように任命された(中略)訓練学校の他に、(中略)厳密な伝道活動すること」と明言している<sup>29)</sup>。実際に、毎朝7時半から礼拝をNurses Homeで行い、学生のみならず職員や患者にも出席を呼びかけ、多くが出席したと述べている<sup>30)</sup>。J.ペリーもL.リチャーズが積極的に宗教的活動を実践している様子を報告している。このように、彼女は、看護教育や実践を通して、キリスト教伝道の推進を自分の使命ととらえ、積極的に活動していたといえる。

## 3. L.リチャーズの京都での5年間の活動から

L.リチャーズが京都での活動を本格的に開始して間もない1886(明治19)年9月に、看病婦学校は5名の学生を迎えてスタートした。この時点では、仮の施設として旧宣教師館の一つを診療所兼看護婦学校として使用した。この頃のことをリチャーズは書簡の中で「看護学生5名は一生懸命働いており、仕事は厳しいが、冬中不平をいう学生はいなかった」「旧宣教師館にいる限り、不便なことが多い」「ここでの仕事は肉体だけでなく魂の癒しにもなっている」<sup>31)</sup>と記しており、異国の地で、不十分な教育環境ながら、学校長、また宣教看護婦としての役割

を果たそうとする姿がうかがえる。

翌年、1887(明治20)年夏、7名の学生が入学した。入院病棟・外来棟、学生寮兼講義室、宣教師館が完成し、同年11月15日に盛大な開院・開校式が開催された<sup>32)</sup>。L.リチャーズは日本語に悩まされながら、また病気の婦人宣教師の世話にも携わりながらも、学生通訳<sup>8)</sup>の助けを借りて、病院の看護と実施指導に没頭した。彼女は、毎日看病法に関する講義とデモンストレーションを実施し、病院では実際に患者の世話をしつつ学生への実施指導を行った。この頃になると、リチャーズは、看護の教育・実践以上に、伝導活動に対する意欲を一段と深め、礼拝や日曜学校の活動やバイブルクラスを積極的に担当するようになるが、過労気味となり、しばしば疲労を訴えるようになる。

1888(明治21)年6月、京都看病婦学校第1回卒業式が挙行され、4名に卒業証書が授与された。リチャーズは回想記の中で「看護職として適正があると証明された立派な卒業証書を受け取った時、日本の歴史の中で重要な瞬間であった。(中略)宣教師の自己犠牲と苦労がそこに至るまでの道を開いたのである」とその意味を振り返っている<sup>33)</sup>。L.リチャーズは疲労回復のためこの夏に休養を取っている。書簡の中に「ここ京都での2年間は私の生涯で最もつらく」<sup>34)</sup>、「もう仕事を辞めるべき」<sup>35)</sup>と記しており、心身の過労を訴え、帰国を真剣に考えるようになる。

9月には第3回生7名が入学した。さらに12月には、ニューヘブン・コネチカット看護婦学校出身のI.スミス(Ida V. Smith, 1856~?)が、L.リチャーズを助け、看病婦学校を充実させるために来日した。L.リチャーズは彼女の活動に期待したが、結局、自身の体調を更に悪化させる引き金となった<sup>36)</sup>。

1889(明治22)年6月、第2回目の卒業式で7名が卒業し、同年11月には15名が入学した。卒業生達もそれぞれの道を進み、入学生も増え、看病婦学校も軌道に乗ってきたかにみえたが、結局、翌年、L.リチャーズは看病婦学校を退職し、帰国することになる。この時期、新島

襄が急逝している。彼女は、帰国する前に中国の上海、三重県の津、北海道の札幌等を静養しながら旅した。そして、1890年10月15日<sup>37)</sup>に日本を離れ、フランス経由で帰国した。

L. リチャーズは、アメリカでの豊富な看護教育の経験を携えて来日し、明治中期の5年間、実質的には約4年間、学校長・宣教看護婦として、創設期における看病婦学校の看護教育と病院看護の実践に尽力した。特に、L. リチャーズの書簡等<sup>19)</sup>からは、異国の地での活動は、本人自身が想像した以上の苦労の連続であったことを物語っている。

## おわりに

アメリカに帰国してからのL. リチャーズは、1891年4月以降、再び多くの看護教育や実践の場での指導に当たり、1909年68歳で現役を退くまで長らく活躍したが、海外での活動はなかった<sup>38)</sup>。彼女の回想記には「私は日本を去り、その後まもなく学校は日本人の手に移管された。この変化の中でもすでに達成していた(看護の)高い水準は少しも低下しなかったと聞いてうれしかった。」<sup>39)</sup>と述べており、日本での苦悩も、振り返ってみれば、「私の務め duty を果たした」という思いが彼女自身の中にあったの

ではないだろうか。彼女は、1930年89歳で母校ニューイングランド婦人子供病院にて永眠した。ボストン郊外のフォレストヒルズ霊園に眠っている<sup>40)</sup>。

一方、同志社病院・京都看病婦学校ではじめられた看護教育は、L. リチャーズにはじまり、I. スミス、そしてH. フレーザーといったアメリカの宣教看護婦により引き継がれた。開始して約10年たった頃、看病婦学校は存続の危機に直面し、1897(明治30)年には病院・学校の管理は、医師佐伯理一郎が実質的にまかされた。結局、1906(明治39)年、同志社理事会は廃校を決定し、佐伯が引き継ぎ、学校は彼の病院内に移され、同志社の手を離れた<sup>12)</sup>。その後、佐伯の学校として約50年間、昭和26年の閉校まで京都看病婦学校の名前は受け継がれた。

看病婦学校の開設から佐伯の管理下に至るまでの約10年間の卒業生は80名にのぼる。その卒業生の多くに、日本や海外で幅広く活躍した足跡をみることができる<sup>41)</sup>。それらは、L. リチャーズが開始し、その後2人の宣教看護婦により引き継がれた看護教育とその実践が、当時の日本だけでなく世界的にもレベルの高い、先進的で国際感覚豊かなものであったことを示唆するものである。

## 文 献

- 1) 依田和美, 岡田麗江, 岡山寧子. L. リチャーズが受けた看護教育～ニューイングランド婦人子供病院看護婦学校～. 大阪府立看護短大紀要 1989; 11: 93-100.
- 2) 岡山寧子, 依田和美. L. リチャーズ来日直後の足跡(1886年横浜から京都へ). 日本医史学雑誌 2004; 50: 24-25.
- 3) 岡山寧子, 依田和美. 1886年におけるL. リチャーズの上海から京都への足跡. 日本医史学雑誌 2005; 51: 214-215.
- 4) 依田和美. 京都看病婦学校で開始された看護教育の概要. 大阪府立看護大学医療技術短期大学部紀要 2003; 9: 69-76.
- 5) 岡山寧子, 竹中京子, 依田和美. 京都看病婦学校設立当初の学校規則の紹介. 日本看護歴史学会誌 2004; 17: 43-49.
- 6) 依田和美, 竹中京子, 岡山寧子. 京都看病婦学校における創設から10年間の学校規則の変遷. 日本看護歴史学会第18回学術集会講演集. 2004: 58-61.
- 7) 依田和美, 竹中京子, 岡山寧子. 京都看病婦学校の教育施設完成までの経緯とその概要. 日本看護歴史学会誌 2010; 23: 印刷中.
- 8) 竹中京子, 岡山寧子, 依田和美. 京都看病婦学校設立当初の通訳伊藤てつについて. 日本看護歴史学会第19回学術集会講演集. 2005: 54-57.
- 9) 岡山寧子, 竹中京子, 依田和美. 京都看病婦学校初期の卒業生の看護活動を紹介した文献. 第27回日本看護科学学会学術集会講演集. 2007: 356.
- 10) 竹中京子, 岡山寧子, 依田和美. 京都看病婦学校第六回卒業生西山徳が創設した協同看護婦会. 日本看

- 護歴史学会誌 2008; 21: 76-85.
- 11) 吉田 亮. 序章総合化するアメリカン・ボードの伝道事業. 同志社大学人文科学研究所編. 同志社大学人文科学研究所研究叢書XXXIII, 来日アメリカ宣教師～アメリカン・ボード宣教師書簡の研究 1869～1890～所収. 東京: 現代史料出版, 1999: 1-56.
  - 12) 長門谷洋治. 上野直蔵編纂. 同志社大学百年史(通史編1) 所収. 11章京都看病婦学校と同志社病院. 京都: 同志社, 1979: 288-318.
  - 13) 上野直蔵編纂. 資料番号131～134 京都看病婦学校規則(133は同志社病院京都看病婦学校規則). 同志社百年史(資料編1) 所収. 京都: 同志社, 1979: 414-443.
  - 14) The A. B. C. F. M. Mission, Kyoto, Japan. The Second Annual Report of the Doshisha Hospital and Training School for Nurses. 1888; April:19-22. (同志社大学総合情報センター今出川校図書館所蔵)
  - 15) 上野直蔵編纂. 資料番号127 Rules and Regulations of the Doshisha Hospital (明治20年6月). 同志社百年史(資料編2) 所収. 京都: 同志社, 1979: 195-213.
  - 16) L.Richards. Reminiscences of Linda Richards. Whitcomb & Barrows Boston, 1924: 1-65. 尾田葉子訳. L.リチャーズの回想記[1]. 看護実践の科学 1976; 10: 60-66. 同[2], 1977; 1: 57-66. 同[3], 1977; 3: 45-51. 同[4], 1977; 6: 54-59. 同[5], 1978; 2: 67-70.
  - 17) 1886年1月23日発行のThe Japan Weekly Mail(横浜)によると, Latest Shipping/Arrivalsの項に, American steamerのCity of Sydney号が1月21日に到着した記録があり, 前年12月29日にサンフランシスコを出発, 1月6日にホノルルを経由している. 同紙Passengers/Arrivedに, 同船からL.リチャーズが到着した記録がある.
  - 18) L. Richards. Reminiscences of Linda Richards, X Japan and XI Second Year in Japan. Whitcomb & Barrows Boston, 1924: 66-99. 尾田葉子訳. L.リチャーズの回想記[6] 10章日本. 看護実践の科学 1978; 5: 67-73. 同[7] 11章日本での2年目, 1978; 7: 67-73.
  - 19) 日本での活動についてのL.リチャーズの書簡は, アメリカン・ボードやウーマンズ・ボードの宣教師たちが本国へ定期的に送る報告書簡であるアメリカン・ボード宣教師文書A List of the Correspondences of the American Board (A. B. C. F. M.) (1869-1896年: マイクロフィルム, 同志社大学人文科学研究所所蔵)に収められている. L.リチャーズ書簡は, 主に1885.9.8～1889.10.16 (マイクロフィルム Roll17.10～38), 1886.1.27～1889.11.9 (Roll32. 書簡番号20～40), 1890.1.23～1890.1.23 (Roll27.6～16) の61通.
  - 20) L.リチャーズが関係するのは1年次～3年次報告書である.
    - ・第1年次報告書1887(明治20)年6月: 上野直蔵編纂. 同志社百年史(資料編2) 所収. 資料番号124 The A. B. C. F. M. Mission, Kyoto, Japan. The First Annual Report of the Doshisha Hospital and Training School for Nurses. 1887, 京都: 同志社, 1979: 180-193.
    - ・第2年次報告書1888(明治21)年4月: The A. B. C. F. M. Mission, Kyoto, Japan. The Second Annual Report of the Doshisha Hospital and Training School for Nurses. 1888, April. (同志社大学総合情報センター今出川校図書館所蔵)
    - ・第3年次報告書1889(明治21)年1月: The Second Annual Report of the Doshisha Hospital and Training School for Nurses. 1889, January. アメリカン・ボード宣教師文書資料一覧1869～1896年. 73頁: マイクロフィルム Roll8. 書簡番号194.
  - 21) 湯楨ます監修. ナイチンゲール著作集第2巻所収, 救貧病院における看護, 付録3「ナイチンゲール基金」による見習い生の職務. 東京: 現代社, 1974: 46.
  - 22) M M Riddle. Boston City Hospital Training School for Nurses, Historical Sketch 1878-1928 (Boston City Hospital Nurses' Alumnae Association). Boston, 1928: 11-16.
  - 23) L Richards. Reminiscences of Linda Richards, XI Second Year in Japan: 85. 尾田葉子訳. L.リチャーズの回想記[7] 11章日本での2年目. 7: 68.
  - 24) L.Richards. Reminiscences of Linda Richards, X Japan: 74-75. 尾田葉子訳. リンダ・リチャーズの回想記[6] 10章日本. 1978; 5: 70-71.
  - 25) L.リチャーズの書簡: 1886(明治19)年10月6日京都より発信. アメリカン・ボード宣教師文書資料一覧1869～1896年. 322頁: マイクロフィルム Roll32. 書簡番号21. 小野尚香, 坂本清音. 書簡からみる日本におけるリンダ・リチャーズの活動(その1). 醫譚 2004; 81:4874.
  - 26) L Richards. Reminiscences of Linda Richards, X Japan: 77. 尾田葉子訳. リンダ・リチャーズの回想記[6] 10章日本. 1978; 5: 71.
  - 27) 上野直蔵編纂. 同志社百年史(資料編1) 所収. 資料番号12 京都看病婦学校設立の演説. 京都: 同志社, 1979: 397.
  - 28) 岡山寧子, 竹中京子, 依田和美. 同窓会誌『おとづれ』からみた京都看病婦学校卒業生の活動(その5)～アメリカン・ボード・ミッション所在地との関連について～. 日本看護歴史学会第23回学術集会講演集. 2009: 94-95.
  - 29) L Richards. Reminiscences of Linda Richards. 1924:



- 81-82. 尾田葉子訳. リンダ・リチャーズの回想記 [6] 10章日本. 1978; 5: 73.
- 30) L Richard. Lady Superintendent's Report, The A.B.C.F.M.Mission, Kyoto, Japan. The Second Annual Report of the Doshisha Hospital and Training School for Nurses. 1888; April:9-10. (同志社大学総合情報センター今出川校図書館所蔵)
- 31) L. リチャーズの書簡. 1886 (明治19)年10月6日京都より発信. アメリカン・ボード宣教師文書資料一覽1869~1896年. 322頁: マイクロフィルム Roll32. 書簡番号22. 小野尚香, 坂本清音. 書簡からみる日本におけるリンダ・リチャーズの活動 (その1), 醫譚 2004; 81;4874.
- 32) J C Berry. The A. B. C. F. M. Mission, Kyoto, Japan. The Second Annual Report of the Doshisha Hospital and Training School for Nurses. 1888; April:1-5. (同志社大学総合情報センター今出川校図書館所蔵)
- 33) L Richards. Reminiscences of Linda Richards. 1924: 98-99. 尾田葉子訳. L. リチャーズの回想記[7] 11章日本の2年目. 1978; 7: 73.
- 34) L. リチャーズの書簡. 1888 (明治21)年10月25日京都より発信. アメリカン・ボード宣教師文書資料一覽1869~1896年. 322頁. マイクロフィルム Roll32. 書簡番号34. 小野尚香, 坂本清音. 書簡からみる日本におけるリンダ・リチャーズの活動 (その2), 醫譚 2004;81;4857.
- 35) L. リチャーズの書簡: 1888 (明治21)年11月19日京都より発信. アメリカン・ボード宣教師文書資料一覽1869~1896年. 175頁: マイクロフィルム Roll17. 書簡番号33. 小野尚香, 坂本清音. 書簡からみる日本におけるリンダ・リチャーズの活動 (その2). 醫譚 2004;81;4856.
- 36) M E Doona. Linda Richards and Nursing in Japan, 1885-1890, Nursing History Review, Official Journal of the American Association for the history of nursing 1996; 4: 99-128.
- 37) L Richards. Reminiscences of Linda Richards. 1924: 96. 尾田葉子訳. リンダ・リチャーズの回想記 [7] 11章日本の2年目. 1978; 7: 72.
- 38) Editorial Comments. The Retirements of Miss Linda Richards. American Journal of Nursing 1909; 9: 807-808.
- 39) L Richards. Reminiscences of Linda Richards. 1924: 96. 尾田葉子訳. リンダ・リチャーズの回想記 [7] 11章日本の2年目. 1978; 7: 72.
- 40) American Journal of Nursing 30; 667. Newsにて「L. リチャーズの死」を伝え, 追悼記事を掲載している.
- 41) 岡山寧子, 竹中京子, 依田和美. 京都看病婦学校初期の卒業生の看護活動を紹介した文献. 第27回日本看護科学学会学術集会講演集. 2007; 356.

## 著者プロフィール



岡山 寧子 Yasuko Okayama

所属・職：京都府立医科大学大学院保健看護研究科保健看護専攻・教授  
京都府立医科大学医学部看護学科看護学講座・教授

略 歴：1977年3月 聖路加看護大学卒業  
1977年4月 聖路加国際病院 看護師  
1979年4月 大阪府立看護短期大学（現大阪府立大学）助手  
1993年4月 京都府立医科大学医療技術短期大学部 助教授  
1996年4月 京都府立医科大学医療技術短期大学部 教授  
2002年4月 ～現職

専門分野：近代看護教育史（アメリカ・京都の近代看護教育史）、老年看護学（高齢者の水分代謝、認知症ケア）  
主な業績（近代看護教育史関係）

1. 依田和美, 竹中京子, 岡山寧子. 京都看病婦学校の教育施設完成までの経緯とその概要. 日本看護歴史学会誌 2010; 23: 印刷中.
2. 竹中京子, 岡山寧子, 依田和美. 京都看病婦学校第六回卒業生西山徳が創設した協同看護婦会. 日本看護歴史学会誌 2008; 21: 76-85.
3. 岡山寧子, 依田和美. 1886年におけるリンド・リチャーズの上海から京都への足跡. 日本医史学雑誌 2005; 51: 214-215.
4. 岡山寧子, 依田和美. リンド・リチャーズ来日直後の足跡（1886年横浜から京都へ）. 日本医史学雑誌 2004; 50: 24-25.
5. 岡山寧子, 竹中京子, 依田和美. 京都看病婦学校設立当初の学校規則の紹介. 日本看護歴史学会誌 2004; 17: 43-49.